

聖書:使徒の働き18章18~28節

説教:イエス・キリストを指し示す聖書

はじめに

パウロは地中海沿岸の町々を巡り、コリントという町にやって来ました。そこでもイエス・キリストの福音を宣べ伝えていきます。これまでの旅は試練の連続でした。福音を聞いて救われる人々も起こされましたが、ユダヤ人からはしばしば激しい迫害にもあいます。あまりの激しさからパウロは次第に心が落ち込んで、前に進めなくなってしまうことがありました。そんなとき、神のことばがありました。「語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるから。」そのことばに励まされてもう一度語り始めます。ところが、ユダヤ人がパウロに反抗して立ち上がり、この男は町を混乱させようとしているという理由で地方総督に訴えられてしまいます。神がともにおられるはずなのに、どうしてこんな目にあうのかと一瞬戸惑いました。でも、パウロは一言も口を開くことなく釈放され、守られた。それだけではない。会堂司であったソステネが、このことをきっかけにして主を信じ、伝道者となっていく。そういうことが起きた。確かに神はともにおられたのだと、後から振り返ってわかりました。

今日はその続きを見ていきます。

1 パウロ

1) ナジル人の誓い (民数記6章)

18節。「パウロは、なおもしばらく滞在してから、兄弟たちに別れを告げて、シリアに向けて船で出発した。プリスキラとアクィラも同行した。パウロは誓願を立てていたので、ケンクレアで髪を剃った。」

このことはすこし説明が必要です。民数記6章にナジル人の近いと呼ばれるものが書かれています。全体は長いので関係のあるところだけを紹介。まず5節。「彼がナジル人として聖別の誓願を立てている間は、頭にかみそりを当ててはならない。」18節。「(聖別の期間が満ちたとき)、ナジル人は会見の天幕の入り口で、聖別した頭を剃り、その聖別した頭の髪の毛を取って、交わりのいけにえの下にある火にくべる。」

2) ユダヤ人にも福音を語るために

パウロが何を誓っていたのかははっきりわかりません。ただ、イスラエルに戻る直前に髪を剃っていますので、これがひとつの手がかりになります。

最初にも触れたように、今回の伝道旅行は大変な旅でした。ピリピでは鞭で打たれて牢に投げ込まれます。テサロニケでは、ユダヤ人たちがならず者を雇って大暴れをさせ、その責任をパウロにかぶせて殺そうとする。なんとか逃げることはできたが、逃げた先へも暗殺チームが送られてくる。そんな連続です。

もちろんこの旅がどれほど危険であるかは最初から承知していました。殉教する覚悟はできていたでしょう。でも死ぬことが目的ではありません。あくまでもイエス・キリストの福音を伝えるのが目的です。だから、一人でも多くの人に福音を語るができるようにと誓いを立てていたのかもしれませんが、もちろん、パウロはイエス・キリストに救われ新しくされたのですから、このようなことをしなくてもよかったです。しかし、彼は「ユダヤ人にはユダヤ人のようになりました」(1コリント9章20節)とも彼は語っています。ユダヤ人を救うために、ユダヤ人の習慣に従ってこのような誓いを立てた。そこに神の助けが働き、多くの人に福音を語ることができました。

2 アポロ

1) 聖書に通じていた

パウロはエルサレムに戻る途中エペソに寄ってから、アクィラとプリスキラの二人に後のことを任せてエルサレムに戻ります。そのパウロの留守の間、ある一人の人物が町にやって来ました。24、25節。「さて、アレクサンドリア生まれでアポロという名の、雄弁なユダヤ人がエペソに来た。彼は聖書に通じていた。この人は主の道について教えを受け、霊に燃えてイエスのことを正確に語ったり教えたりしていたが、ヨハネのバプテスマしか知らなかった。」

アレクサンドリアは、エペソから見れば地中海をはさんだ向こう側、エジプトの大きな港町であり、立派な図書館が建てられるほどの古くからの学問都市で、ギリシャ時やユダヤ人がたくさん住んでいました。後にマルコの福音書を書いたマルコがここに教会を建てたという話もあります。アポロ

はこの町で他のユダヤ人から旧約聖書について深く学んでいたのでしょう。

2) ヨハネのバプテスマしか知らなかったが

アポロは会堂に入って大胆に語り始めます。それを聞いていたのがアキラとプリスキラの二人でした。イエスのことを霊に燃えながら正確に語っていたけれど、ヨハネのバプテスマしか知らないことに気がつきました。

ヨハネのバプテスマのことは、ルカの福音書3章に出て来ます。人々がローマ帝国に苦しめられ、救い主を待ち望んでいたときのことです。バプテスマのヨハネが現れ、はっきりと罪を語り、罪ある者の上に下る神のさばきを語り、罪を告白して悔い改めのバプテスマを受けるようにと叫びます。そしてこう言います。「私は水であなたがたにバプテスマを授けています。しかし、私よりも力ある方が来られます。私はその方のはきものひもを解く資格もありません。その方は聖霊と火で、なたがたにバプテスマを授けられます。」(ルカ3章16節) 預言者イザヤは、「こうして、すべての者が神の救いを見る」と語ったけれど、この方こそ、イザヤが語った救い主である。ヨハネはこう語ってイエス・キリストを指し示します。

アポロが知っていたのはそこまでだったようです。イエスがヨハネから洗礼を受けられ、その後どのような生涯を歩まれたのか、そして十字架でどのような苦しみ味わわれたのか、十字架で死なれて墓に葬られてから三日目によみがえられたこと、それらをほとんど知らなかった。知らなくても、旧約聖書には、ナザレのイエスは救い主キリストであることが書かれていると証明できた。これはむしろ驚きです。

プリスキラとアキラはアポロを呼び、イエスが何をしてくださったのかを詳しく教え、神の道をもっと正確に説明します。

アポロはそれを聞きながら深く感動しただろうと思います。旧約聖書に書かれていること、そこには十字架で死なれ三日目によみがえられたイエスこそ神が遣わしてくださった救い主であることをはっきりと指し示している。そのような確信を抱いて彼はアカイアに渡って行きます。

3) コリントの教会でユダヤ人を論破した

アカイアと言われてもどこのことかと思いますが、地図で見るとアテネの西にあるコリントの町のこのようです。そこへアポロがやってきました。27後半から28節。「彼はそこに着くと、恵みによつ

て信者になっていた人たちを、大いに助けた。聖書によってイエスがキリストであることを証明し、人々の前で力強くユダヤ人たちを論破したからである。」

アポロは何を助けたのでしょうか。なぜアポロはコリント教会で歓迎されたのか。そのことに触れておきます。

私が初めて聖書を手にしたのは学生時代で、福音書ですこし読んだのですがそのうち興味を失い、ほかの人に聖書をあげてしまいました。次に聖書を手にしたのは、私の32歳の誕生日に妻がプレゼントしてくれた時でした。その聖書をずっと開かないまま机の上に置かれたままほこりをかぶっていました。その聖書を開くことになったのは、イエスこそ私の救い主であると信じた時からでした。そこに書かれていることが嘘であるとか作り話は思わなかった。もちろん、イエスが湖の上を歩かれた、というところをどう理解していいかわからない。そういうところはあったけれど、ここには自分がずっと捜し続けてきた真理が書かれていると受けとめることができました。今の時代は本当に恵まれています。安心してクリスチャンになることができる。

3 イエスはキリストである

1) ユダヤ人からの攻撃

でも二千年前は全然違いました。教会はできたばかりで、どのように運営したらよいか毎日が手探りの状態です。パウロは限られた時間の中で一生懸命教えたでしょうが、いつまでも一つところにとどまっていることができない。次の町に行って伝道しなければなりません。そうすると残された人たちが信仰を守っていくしかない。言わば産まれたばかりの赤ちゃん、よちよち歩きの状態です。

そこで大きな問題となったのはユダヤ人です。パウロがいたときもそうでしたが、彼らはことあるごとに教会を迫害したり攻撃してくる。「おまえたちが信じているイエスは救い主ではない。旧約聖書にはそんなことは一言も書かれていない。お前たちはパウロという男にだまされているのだ。」そんな話をずっと聞かされます。なにしろユダヤ人は旧約聖書を土台にしたアブラハム以来の歴史と伝統と重みがあります。それに対してクリスチャンはまだ始まったばかりで歴史もなければ伝統もない。しっかりとした神学校や指導者がいるわけではない。ちょっと風が吹いたらあつというまに吹き飛ばされそうな頼りない存在にしか見えません。

もしかして、自分たちは間違っただけを信じているのではないか。不安に駆られます。

2) 聖書によって

そこへアポロがやって来ました。彼は聖書に通じているユダヤ人でしたから、教会を攻撃してくるユダヤ人と同じ土俵に立って話ができます。アポロは、イエスと呼ばれる方こそ預言者たちをとおして神が約束しておられた救い主キリストであることを旧約聖書を開きながら証明していきました。それに対して誰も反論できない。こうして教会は大いに勇気づけられていきます。自分たちは間違っていなかったのです。正しいことを信じていた。そのような確信を得ることができました。

時々、「どうして聖書は旧約聖書と新約聖書のふたつあるのですか」と尋ねられることがあります。イエス・キリストが来られたのだから、旧約聖書はいらない。新約聖書だけあればと考える人たちも過去にはおりました。しかし、私たちは旧約新約ふたつどちらも大切な聖書と考えます。旧約聖書がイエスこそキリスト救い主であると指し示しているからです。アブラハムから数えても、キリストが来られるおよそ三千年も前から神は救い主を遣わすと約束しておられた。神はその約束をイエス・キリストを通して成就してくださった。ならば、これから先のこと、天の御国に迎えてくださるとの約束も必ず果たして下さるに違いない。私たちは確信できるわけです。

二千年前、多くの苦しみを通りながらも、最初のクリスチャンたちは信仰を捨てず、旧約の中に示されたイエス・キリストを信じて、いま私たちにその信仰を伝えてくれました。そこに神の励ましがあったことを覚えて御名をあげます。